

1. 韓国考古学の時代区分

韓国考古学は旧石器時代→新石器時代→青銅器時代→初期鉄器時代→原三国時代→三国時代などに時代を区分している。このうち旧石器時代から青銅器時代までは一般的な考古学の時代区分であり、初期鉄器時代・原三国時代は韓国独自の時代区分である。もちろん櫛目文土器時代(新石器時代)、無文土器時代(青銅器時代)のような独自の名称を使用する場合もあるが、一般的には新石器時代、青銅器時代という時代区分に従っている。各時代の年代は、旧石器時代は数十万年前から B.C.1 万年まで、新石器時代は B.C.1,500 年まで、青銅器時代は B.C.300 年まで、初期鉄器時代は B.C.100 年まで、原三国時代は A.D.300 年までである。

2. 韓国青銅器時代の文化様相

韓国青銅器時代は、琵琶形銅剣、無文土器、稲作農耕、支石墓の築造などを典型的な特徴としている。青銅器時代は早期・前期・中期・後期に区分されており、一般的に土器の変化と青銅器の登場により時期を分けている。

早期(B.C.1500~1300)は新石器時代から青銅器時代に移行する転換期であり、刻目突帯文土器を使用し、川辺に村を作り畑作をしていたと考えられている。

前期(B.C.1300~900)は孔列土器や二重口縁短斜線文土器などが使われ、支石墓・石棺墓などの墓が本格的に築造され始める。この頃から畑作とともに稲作も始まる。

中期(B.C.900~500)は琵琶形銅剣が本格的に登場する時期で、外反口縁土器、三角形石刀、一段柄式磨製石剣などが特徴的な遺物である。集約的な稲作農耕を基盤とした大規模集落や環濠集落などが作られ始める。また、よく知られている松菊里遺跡がこの時期に該当する。

青銅器時代後期(B.C.500~300)には粘土帯土器、黒色磨研土器が使われ始める。

□ 道具

新石器時代は櫛目文土器の時代であったが、青銅器時代は文様のない無文土器が使われる。時期によって刻目突帯文土器・孔列土器・二重口縁短斜線文土器・外反口縁土器・粘土帯土器などが主に使われている。器種構成は深鉢・壺・浅鉢・豆形土器などであり単純である。

青銅器時代の石器は磨製石器のみで、石鏃・磨製石剣・石槍などの狩猟道具の他に、農耕と関連した半月形石刀・石鎌・木材を加工する時に使う太型蛤刃石斧・柱状片刃石斧・抉入石斧・鑿などがある。

その他、日常生活には多くの種類の木器が使われていたと考えられるが、残存する遺物が多くなく正確な様相は分らない。青銅器時代という時代名称のわりに、実際に出土している青銅器は琵琶形銅剣のみで、初期鉄器時代になってから青銅鏡などの多様な青銅器が製作、使用された。琵琶形銅剣は日常に使われた道具というよりは、身分を表す象徴として使われたと考えられる。

□ 住居跡と集落

青銅器時代の住居は、長方形系と円形系に大別される。青銅器時代の早期・前期には大型の長方形住居が使われ、中期・後期になると小型の方形と円形住居地が使われる。特に円形住居というのは、松菊里文化の特徴的な住居形態である。時の流れにより住居が大型から小型に変わっていくのは、大家族から核家族へと家族制度の変化と関係していると考えられる。

青銅器時代の集落は丘陵の上や川辺に立地するのが一般的であり、特徴的な集落の形態としては環濠集落が挙げられる。環濠は円形や方形の形で集落を囲んだものである。また、これとは異なり丘陵の頂上部を小規模に区画する環溝がある。環濠が村を守る防御のためのものであるなら、環溝は儀礼空間を区分する施設であると見ることができる。

□ 墓

青銅器時代の代表的な墓は支石墓であり、その他にも石棺墓・石蓋土坑墓・甕棺墓・周溝墓などの墓が作られた。前期から本格的に墓が作られ始めるが、前期には支石墓と石棺墓・周溝墓、中期以降は石棺墓・甕棺墓・石蓋土坑墓が主に作られる。支石墓は青銅器時代の全時期に作られており、青銅器時代中期以降になると墓域式支石墓と呼ばれる大型の支石墓も築造される。

□ 生業経済

青銅器時代の生業経済は、農耕と狩猟・採集・漁撈など全てが行われており、集落の立地により主な生業経済の種類は異なっている。原始的な畑作農耕は、新石器時代の遺構から確認されているが、稲作は青銅器時代に入って本格的に始まった。青銅器時代中期、松菊里文化段階の遺構から大規模な水田が発見されており、その他多くの遺跡で炭化した米と雑穀が発見されている。

3. 青銅器時代中期の扶余松菊里遺跡

1974 年、扶余松菊里遺跡は地域住民が偶然石棺墓を発見し届け出たことから、知られるようになった。1975 年に第 1 次発掘が始められ、2024 年現在まで 27 次にわたって発掘調査が行われた。発掘調査の結果、以前は確認されなかった円形の住居跡や外反口縁土器などが確認され、新たに韓国青銅器時代の中期を設定することとなった。

扶余松菊里遺跡は現在まで遺跡範囲の 10%未満のみが発掘調査されており、100 棟以上の住居跡、多数の貯蔵穴、掘立柱建物などと共に数百 m に及ぶ木柱列などが確認された韓国の青銅器時代の代表的な遺跡である。このような大規模な集落が作られたのは、水田稲作を土台とする経済的背景があったために可能であったと考えられる。このような文化的特徴として、扶余松菊里遺跡を指標とする松菊里文化が設定された。松菊里文化は韓国の西南部のほとんどの地域に及んでいる。そして松菊里文化は南海岸地方に広がり、日本列島に渡っていき日本の弥生文化の成立に影響を与えた。

4. 韓国の青銅器時代と日本の弥生時代

韓国と日本は先史時代から文化的な交流があった。九州地域では新石器時代の土器が発見されており、韓半島の南海岸地域では九州地域の縄文土器と腰岳の黒曜石が発見されている。

青銅器時代にも文化的な交流は活発に行われており、特に松菊里文化の多様な文化要素が日本

に渡っている。稲作農耕の技術とそれに関連した半月形石刀など多様な農耕道具と磨製石剣などの石器・松菊里形住居・支石墓など多様な物質文化要素の他に人々も日本に移動した。このような韓国の青銅器時代の様々な文化要素は、日本の弥生文化の成立に重要な役割を果たした。しかし、松菊里文化の要素がそのまま日本に定着したのではなく、日本の各地域で必要な要素だけを選択的に受け入れ、地域ごとに変容した形で弥生文化の一部になっていった。また、文化交流は韓国から日本への一方向ではなく、日本の弥生文化の要素が韓半島に伝播し、韓半島の南海岸地域では、弥生土器が確認されている。これまで韓国青銅器時代と弥生時代の文化交流についての研究は、直接的な関係があった韓半島の南海岸と九州地域を中心に行われてきているが、今後は東日本との比較研究も必要である。

図録キャプション

- 図 1 青銅器時代土器各種
- 図 2 青銅器時代石器各種
- 図 3 青銅器時代木器各種
- 図 4 細長方形住居（蔚山校洞里）
- 図 5 円形住居跡（松菊里式住居）
- 図 6 環濠集落（昌原南山）
- 図 7 環溝（安城盤諸里）
- 図 8 水田（蔚山無去洞玉峴）
- 図 9 畑と住居跡（晋州大平里）
- 図 10 周溝墓（春川泉田里）
- 図 11 甕棺墓（益山石泉里）
- 図 12 石棺墓（大邱東川洞）
- 図 13 墓域式支石墓（山清梅村里）
- 図 14 石棺墓（宝城東村里）
- 図 15 松菊里遺跡遠景
- 図 16 松菊里遺跡 1 号石棺墓出土遺物

1. 今日の時代相と先史時代研究との関係

本発表では青銅器時代の扶余松菊里遺跡を論じるにあたり、まず今日の時代相から見ていこうと思う。人々が多くの関心を持ち発達させ、多大な影響を受けた分野を見ていくと、その時代の姿を知ることができる。そのような意味で、今の時代は「宇宙探査の時代」といえる。宇宙探査は現時代に最も発達した分野であり、あらゆる科学と先端技術が融合し、日々進化している。例えば月面に基地を建て資源を採掘するなど、人類が常駐することを目標とする「アルテミス計画」が進行中である。

ところで、このような先端科学技術の発達は、人間の歴史観を大きく広げている。つまり宇宙から地球を観察するようになり、特定地域(国家)を越え人類全体を一つの単位としてとらえるようになった。そして「ビッグヒストリー(Big History)」と呼ばれる歴史観を通じて人類の特質を見出すことで、人類の歴史全体を体系的に理解するようになったのである。この点で、大きく注目されている分野が先史時代なのである。その理由は大きくわけて二つあり、一つは数百万年に及ぶ人類の歴史は大部分が先史時代であること、もう一つは人類特有の特徴のほとんどが、先史時代に現れていることである。

韓半島の代表的な先史時代の遺跡は、扶余の松菊里遺跡であるので、松菊里遺跡の調査成果と整備活用計画を論じることは、韓半島固有の歴史はもちろん、人類の歴史を理解し保存していくという上で、大きな意味があると考ええる。

2. 先史時代・松菊里遺跡調査成果の社会的意味

人間の特徴の一つに、社会を作って生きているということがある。地球上の生き物の中には群れで暮らす動物もいるが、人間のように大規模で体系的な社会組織を作るとはめったにない。人間のこのような営みは、人類の歴史を他の生物とは異なる方向に進めてきた重要な要素である。人類はどのようにして大規模な社会組織を作ることができたのだろうか？ この問いにアプローチするために、大規模で体系的な社会組織が初めて出現する時代の特徴を見ていこうと思う。

韓半島では青銅器時代中期に大規模な社会組織が現れており、その様相を遺構や遺物などで最もよく保存されているところが、扶余の松菊里遺跡である。松菊里遺跡の人々が大規模で体系的な社会組織を作っていたことを示す証拠は大きくわけて2つある。

一つは、それ以前とは異なり多くの住居跡が発見されているからである。旧石器時代の遺跡では住居跡がほとんど発見されず、新石器時代の遺跡からもほとんど少数の住居しか発見されていない。これに対して、扶余松菊里遺跡からは100基以上の住居跡が確認されている。つまり、旧石器時代の人々は主に小規模の集団を構成し移動生活をしていたが、新石器時代を経て青銅器時代に入ると、人々は定住し大規模なムラという社会組織を維持していたと考えられている。

二つめは、特別な役割をもつ施設物と道具が発見されたからである。松菊里遺跡では200mを超える木柱列と大型地上式建物など位相の高い遺構、青銅器製作など生産を専門的に行っていたことと関連する遺物など、他の遺跡では発見されていない遺構と遺物が確認されている。このよ

うな点から、青銅器時代中期は松菊里遺跡のように、中心地であるムラとその他の一般的なムラで構成された体系的な社会組織が出現した社会であったと研究者たちは解釈している。

3. 扶余松菊里遺跡の整備と活用計画の方向性

扶余松菊里遺跡の整備と活用計画の方向性については、総合整備計画によって理解される。扶余郡は4回にわたり総合整備計画を策定しており、今回の2023年度総合整備計画は基本的に遺構の調査・整備・活用方案を策定し、さらに松菊里遺跡のあるべき姿を取り戻し、地域経済を発展させるという目的で立てられた。そこで、このような目的に沿った計画を立てるためには、以下の2つのことが不可欠だと考える。

第一に、段階別に計画を立てる必要があるということである。その理由は、松菊里遺跡のように巨大な先史遺跡の総合整備は整備が難しいことにある。長期にわたり多額の予算が投入されるため、段階ごとに計画を立てなければ一定期間に完了することは難しく、成果が得られにくい。そこで扶余郡は「土地購入」→「学術調査および学術研究」→「整備と保存管理の施行」→「常時管理」の順で総合整備を進めようとして計画した。つまり、学術調査と整備のため、指定区域内の私有地を買い入れる。そして核心区域を発掘調査し、遺跡の構造・性格を究明し、学術調査を土台に遺跡の原形考証のための研究を進めた後に、遺跡の原形、あるいはこれからのあるべき姿を見つけるために主要遺構の整備を行っていく。

第二に、遺跡をいくつかのエリアに分け、そのエリアに特徴的な整備を行うことである。扶余の松菊里遺跡は、場所により地形と景観が異なり、確認されている遺構と遺物も様々である。したがって、松菊里遺跡がもつ様々な価値をできるだけ活用できるようエリアごとに適した整備計画を立てる必要がある。そこで今回の計画では、①遺構整備エリア ②入場・利用エリア ③景観整備エリア、長期検討対象地、留保区域に区分した。

①遺構整備エリアは、住居・墳墓・木柱列・建物跡などの青銅器時代の遺構を現す空間である。遺構整備の基本的な方向性は、遺構をしっかりと保存しながら、来訪者が理解しやすいよう遺構の特性を活かして整備することにある。ところが、松菊里遺跡は遺構の残存状態と特性は遺構ごとに異なるため、それぞれの状況に応じて整備方法を選択していくことが必要である。まず石棺墓、甕棺墓などの墳墓は保護施設を設けて「露出展示」をしようと考えている。一方、住居跡、木柱列、建物跡の場合、残存状態が良い遺構は外観を再現するが、それ以外は平面形態が分かるように地面に「表示」する。

②入場・利用エリアは、先史彫刻・ビジターセンター・発掘史メモリアルパーク・農耕遺跡記念館・先史体験および再現村などが建設される空間である。先史彫刻は遺構や遺物をモチーフにデザインする予定である。またビジターセンターは体系的に遺跡を管理・広報するための場であり、発掘史メモリアルパークはこれまでの発掘調査の歴史を伝えるものである。農耕遺跡記念館は松菊里遺跡が青銅器時代農耕文化を代表する役割を果たす目的で建設されるものであり、先史時代体験・再現村は様々な教育プログラムを担当する予定である。

③景観整備エリアは、青銅器時代の集落遺跡の植生景観を造成していく空間である。ここには先史植物テーマ館・植物栽培園・水田研究実験場のような専門施設とともに、先史の丘・松菊里の広場・風の丘・日の出の広場・先史の森のような場を造成する。ここは研究はもちろん、観光効果まで最大化することができるエリアである。先史植物テーマ館は青銅器時代の植生と収穫作物を展示し、周辺地域の青銅器時代の植生について見せる目的の施設である。植物栽培園には発掘調査で判明した木や植物が植えられ、ここの苗木は今後、遺跡整備に活用される計画である。水田研究実験場では農耕実験栽培地を造成し、松菊里遺跡から出土した作物を栽培し研究する予定である。また水田では青銅器時代の稲作農耕を再現し、一般市民を対象とした週末農場を運営する計画である。

図版

- 図1 14次発掘調査木柱列
- 図2 大型地上建物と木柵
- 図3 石棺墓と甕棺墓
- 図4 5-23号 大型 細長方形住居
- 図5 54-5号 火災住居地
- 図6 壺形土器各種
- 図7 銅斧鋳型
- 図8 赤色磨研土器各種
- 図9 両耳付赤色磨研土器
- 図10 三角形石刀
- 図11 磨製石剣
- 図12 琵琶形銅剣
- 図13 玉